

スポーツマン^{せいしん}精神とは

休み時間の ことです。ジョディーは、^{とも}友だちと ^{やきゅう}野球を
していました。

「アウトだよ、ジョディー！」 ティオが さげびました。
「かみの毛に タッチしたからね。」

「そんなの、ないわ！ かみの毛に タッチしたなんて、
だめよ！」 ジョディーはおこって さげびました。

「タミー先生。」ティオが、その時 ^{とき}子供たちを
^み見ていた ^{せんせい}先生に たずねました。「ジョディーの
かみの毛に タッチしたんですけど。アウトになりますか？」

「じゃあ、いったん ^{しあい}試合を ^{ちゅうだん}中断して、ルールを どうするか、
^{みなお}見直しましょうか。」 タミー先生が ^{ていあん}提案しました。

^こ子どもたちは、^{きょう}今日 やる ^{しあい}試合のルールを どうするか、
^{はな}話し合い始めました。

「かみの毛は、^{からだ}体の ^{いちぶ}一部です！ そうで なきゃ、
^{ふく}服に タッチしても ^{だめ}だめっていう ことになると
^{おも}思うんですけど。」と、ティオ。

「だけど、わたしの ^けかみの毛は ^{なが}長いから、すぐに
タッチされちゃうわ。それだと、つかまってばかりじゃ ない。」



「こういうのは どう、ジョディ。」
とち友だちの メリッサが いました。

「かみの毛を まとめれば、すぐに
タッチされないわよ。そうすれば、
かみの毛に タッチで アウトに できるわ。」

「分かったわ。タミー先生に 手伝って
もらうわね。」と、ジョディ。

いったん ルールが 決まると、試合が
再開しました。それでも ジョディは おもしろく
ありません。走るのが あまり 速く ない 上に、
ホームランも 打てないので、やっぱり すぐに
アウトに なってしまうだろうと 気がかりなのです。
次の バッターが ヒットを 打ったので、ジョディは
本塁を 目指して 一生けん命 走りました。でも、
どんなに 速く 走っても、やっぱり ダニーが
ボールを キャッチするまでには 間に 合わず、
アウトに なってしまいました。

「アウトだよ、ジョディ。」と、ダニーが いました。

「ダニー！ どうして わたしが アウトなの？
ほかにも だれか いるじゃない！ わたし、
もう プレーしたく ないわ！」 ジョディは
おこって さげびました。



「だけど、それじゃフェアじゃないよ!」と、
ダニーが言いました。

「とにかく、この試合はつまらないから、
わたしはほかのことをするわ。」そう言うと、
ジョディはプンぷんおこって行ってしまいました。
そして、運動場のすみのベンチにすわりました。

「どうしたの、ジョディ?」 タミー先生が
たずねました。

「またアウトになっちゃったの! それで、
もうやりたくないって言ったら、ダニーが、
それじゃフェアじゃないって言うのよ。わたしは
ただ、本るいまで走りたかっただけなのに!」

「ジョディ。みんなと試合をする時は、
良いスポーツマン精神で のぞむことが大切よ。
つまり、いっしょに仲良くプレーできて、
ルールを守り、勝っても負けても、いさぎよいて
ことね。」と、タミー先生が説明しました。

「だけど、負けるのは楽しくないわ。ホームイン
できない時もね! きまり悪いもの!」



「わかるわ。わたしもね、若いころ
学校で初めてバレーボールをやった時は、
ボールを受けそこねるか、強く打ち過ぎて
ばかりだったの。それですごくきまり悪く
なって、プレーしたい気分じゃなくなったのよ。
ミスばかりするのがはずかしくて、やめたく
なったの。だけど、コーチが、練習し続けて
ごらんって、いつもはげましてくれたの。
ミスなんか気にしないで、上達できるよう
練習し続けることだけを考えなさいってね。

それでしばらく練習し続けていたら、
だんだんと上手になってきたのよ。最高に
上手なプレーヤーではなかったけれど、
それでも満足することを学んだわ。だから、
たとえ勝てなくても、思い通りに
プレーできなくても、楽しむことは
できるのよ。」

「まあ！ わたしって、スポーツマン精神が
なってなかったのね。チームにとっても、
いいメンバーじゃなかったわ。」と、ジョディ。



「でも、^{いま}今からでもおそくないわ。
またやってみたらいいじゃないの。
お友だちの^{ところ}所へ行って、^{はな}話してみたら？
それと、これはただの^{しあい}試合であって、
^{いちばん}一番大切なのは^か勝ち負けじゃ^まないって
ことをわすれないでね。^{とも}友だちと
いっしょに^{たの}楽しくやって、いい^{うんどう}運動に
なればいいのよ。^{ただ}正しい^{こころ}心がまえて^よ良い
スポーツマン精神が^{せいしん}あれば、みんなも
いっしょにやって^{たの}楽しいし、きっと
あなたも^{たの}楽しくなるわ。」

「ありがとう、^{せんせい}タミー先生。わたし、
がんばってみるわ。」

ジョディはみんなの^{ところ}所へもどって
いきました。

「わたし、さっきはあまりいい
チームメイトじゃなくて、ごめんね。
おこってじだんだをふんだりするべきじゃ
なかったわ。またいっしょにプレーしても
いいかしら？」



「もちろんだよ、ジョディ！ ぼくたちの
チームは ^{いま しゅびがわ} 今、守備側なんだ。ジョディは
2 塁を ^{まも} 守ったら いいよ。」

「^わ 分かったわ。」 そう ^い 言うと、ジョディは
自分の ^{じぶん} ポジションにつきました。

^{し あい} 試合が ^{すす} 進むにつれ、ジョディは、^{じぶん} 自分が
ミスした ^{おち どお} ことや ^い 思い通りに ^い 行かなかったことは
^き 気に ^{し あい} せず、^{たの} 試合の ^{ぶぶん} 楽しい ^{かんが} 部分を ^{かんが} 考えるように
していたら、^{ほんとう} 本当に ^{たの} 楽しく ^い なってきた ^{こと} ことに
^{きづ} 気付きました。何度か ^{なんど} ボールを ^お 落としたり、
^{ころ} 転んだり、ミスしたりは ^し しましたが、^{し あい} チームの
^{たす} 助けになる ^{し あい} プレーも ^し しました。試合では
^か 勝てなかったけれど、^お 終わった ^{とき} 時には、^{だれ} だれも
^{おも} 思っていなかったくらい、ジョディは ^{まんめん えが} 満面笑顔でした。

「^{し あい} いい ^{し あい} 試合が ^{でき} て、^{みんな} みんな、^あ ありがとう。
いっしょに ^よ プレーできて ^{うんどうじょう} 良かったわ！」 ^{うんどうじょう} 運動場を
^{あと} 後に ^し ながら、ジョディは ^{とも} 友だちに ^い 言いました。

文：デヴォン・T・ソマーズ 絵：アルビ

デザイン：ステファン・ミラー

出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2016年、
ファミリーインターナショナル “A Good Sport”--Japanese
関連の読み物は [こちら](#) ⇒ 子供のための物語、スポーツマン精神

